

令和8年度 第1回 東近江市市民協働推進委員会 会議録

◆開催日時 令和8年5月20日（水）午後7時から午後9時まで

◆開催場所 東近江市役所313会議室

◆出席者

市民協働推進委員 深尾 昌峰、奥村 昭、田村 晃、元嶋 雅司、伊藤 真也
綾 康典、富田 由美子、藤 一道、小島 淳司、朝比奈 遥
川神 仁志

（事務局）

市民部 福嶋

まちづくり協働課 今村、西川、松居、西堀

◆議題

(1) 今年度の委員会予定について【資料2から資料4】

(2) わがまち協働大賞シンポジウムについて【資料5】

◆開会

○事務局挨拶

○自己紹介

○正・副委員長の選出

○委員長、副委員長挨拶

○委員会の概要について

事務局から資料1について説明。

<委員長>

東近江市は内から見るとあまり分からないが、外から見るとすごいまちで、市民活動が重層的である。何かというと、市民が楽しそうに様々な市民活動を展開しているところである。自分たちで必要なものは自分たちで、自分たちの幸せは自分たちでと、全て自分たちで作りに上げてこられている。

公益財団法人東近江三方よし基金は、全国でトップクラスのお金を扱っている。それは配り先があるということであり、配り先があるということは、東近江市はそれだけ市民活動が活発であるという証拠である。

地域担当職員制度が10年も続いている自治体は全国的にみても珍しい。また、ジャズフェスにおいても市民中心でここまで大きなイベントを行っていることは本当に素晴らしいこと。

これらの素晴らしさや価値に気づいていない活動はたくさんあるため、外からの評価や視点を生かしながら、より推進していけると良い。

○議題

(1) 今年度の委員会予定について【資料2から資料4】

<事務局>

今年度は、1年間かけてわがまち協働大賞の方向性などについて議論を行うとともに、本市の協働のまちづくりについて議論を行う。協働のまちづくりについては、現在のところ具体的な議論内容は未定であるため、本委員会で議論したい。

資料4は、第二次計画推進に当たり、令和6年度から令和7年度末にかけて取組施策を検討、試行、実施で評価している。

<委員長>

資料4にあるように、わがまち協働大賞は発展的展開として検討という評価になっている。わがまち協働大賞は、市民活動を他の人が褒める、認めてあげるというのが発端である。今年度は、わがまち協働大賞シンポジウムを通して、協働のあり方を考えること。もう一つは、東近江市の協働のまちづくりについて資料4を基に議論内容を決め、議論していくことが本委員会の仕事である。

<委員>

以前、わがまち協働大賞を受賞させてもらったが、他の団体の協働という活動を知る機会にもなったため、とても良い取組と思われる。

<委員>

より良くしていく、豊かなまちづくりということがぼんやりしている。みんなが目指しているところが同じでなければ、問題は変わってくるのではないか。皆さんが思う理想のまちを教えてください。

<委員長>

今回は、そのような疑問や課題、イメージを出していただき、共有していく回としている。

<委員>

昨年度までも議論していたが、地域担当職員制度の充実やコミュニティセンターの利用などについて議論したい。まちづくりネット東近江には、活動拠点を探している市民活動団体の相談が多く、コミュニティセンターや文化交流センターの貸館等につながればという期待を込めて。

<委員>

自治会向けに自治会支援のDVDや資料集を作成しているということであるが。

<事務局>

自治会活動を実施する上で、よくある質問や、自治会活動を円滑に進めるための参考となる内容をまとめている。DVDはまちづくり協働課にて貸出している。

<委員>

東近江市は自然と歴史文化の豊かな地域としてイヌワシの生息や政所茶などがあり、八日市南高等学校としても奥永源寺にヒアリングに入らせてもらっており、このような自然や伝統文化が守られることを願っている。

<委員長>

中高生にとって現地でのヒアリングはとても良い経験になる。

<委員>

市民活動している人や住んでいる人は、自らの地区の良さについて知っているが、他地区のことは全く知らないことが多い。他地区の良いところを知ってもらうとともに、他地区で行われている活動についても知ってもらえるような機会があると良い。

<委員>

第2層協議体にも14地区があり、14地区それぞれが魅力ある取組を行っている。地区でとどまっている協働の取組が、他地区との交流により新たな協働が生まれるような場所があると良い。

<委員長>

住民自治と自治会運営を混同し、話してしまっていることがある。持続的な自治会活動というものは、延長線上にあるまち協の支援に関係してくる。また、まちづくり協議会としては、担い手不足は目に見えて分かる状況であり、次の世代にどのようにバトンを渡せるか考える必要がある。

<委員>

まちづくり協議会は地域課題の解決への取組や地域の特色を生かした地域活性化への取組を核としているが、自治会活動を支援するというのも理想形なのか。

<事務局>

単位自治会のような単年度で交代する組織で実施することができないような、まちづくりや防災などをまちづくり協議会が担っている。

<委員長>

まち協と自治会どちらが上下というものはない。補い合う関係で上手く連携してもらいたい。

<委員>

資料4「自治会とまちづくり協議会との連携促進」が実施となっているが、まち協に長く携わっているとまち協と自治会の連携が遠ざかっているように感じる。実施で終わりではなく、今後の形についても検討していく必要があるのではないかと。

<委員>

外から見るからこそ分かること、転入者から見る東近江市の魅力を発信してもらうなど。発信できる場を設け、そのような場に地域担当職員も入ることで、職員自らも地域の魅力を再認識することができる。

<委員長>

転入者に対する魅力発信は良くあるが、転入者から見た魅力発信は新しいのではないかと。

<委員>

自分たちの幼少期は、自治会行事がとても楽しかったイメージであったが、コロナ以降自治会活動が簡素化されている。あの頃のような盛り上がりを取り戻すことができればよいが。

<委員長>

昭和の形をそのまま継承するのは難しいが、現在の形に適応したものができればよい。PTAには参加しないが、おやじの会を立ち上げ参加されている方は多い。自分がやる、自分でなければできないという流れが自治会にも出てこれば、自主的に参加されるようになるのではないかと。

<委員>

空き家の情報提供などが検討となっているが、空き家の活用などは進んでいるのか

<委員長>

東近江市としては、空き家の件数は減少傾向である。しかし、空き家を活用した、市民活動の拠点などにつながるまで至っていない。

<委員>

近年は、集落営農にシフトしているが、自治会やまち協と同じく担い手が高齢化してきている。未利用地もあり、条件の悪いところは利用されることもなく、売れることもない。未利用地や農業という観点から、まちづくりと結びつけることはできないかと。

<委員>

農業高校で農業について勉強しても、将来的に農業の職につくことがない。

<副委員長>

地区ごとで活発に人づくりや地域との関わりが積極的に推進されているが、地域に共有されていない。人づくりや地域づくりの拠点に来られない人にどのようなアプローチをしていくか、動ける人が動くしかない状況。

<委員長>

各地区まち協で交流できる場を考える必要がある。例えば総合交付金を使って、各地区まち協の交流の場、又は団体の交流の場を設け、良いところをマネするところから始めてみるのも良い。交流の場、そして情報共有の質を上げる必要がある。

(2) わがまち協働大賞シンポジウムについて【資料5】

<事務局>

資料4の進捗管理にもある通り、わがまち協働大賞の発展的展開を検討する必要があり、また昨年度末に本推進委員会において決めたとおり、わがまち協働大賞のあり方を1年かけて考える。10年間の取組を振り返り、成果や課題を整理するとともに、今後のわがまち協働大賞のあり方について考える。その手段として、ミニ座談会及びシンポジウムを通じて、多様な意見を収集・整理し、今後のわがまち協働大賞の方向性や協働の形を検討する。

<委員長>

ミニ座談会は、開催して意見を収集するだけではもったいなく、成果を何かにつなげる必要がある。また、座談会で問いかける内容がシンポジウムでのテーマになれば良いのではないか。シンポジウムに向けての基礎資料としてだけではもったいない。

シンポジウムの登壇者が4人を想定しているからと言って、4つのテーマにこだわる必要はない。また、ミニ座談会では、同じテーマにこだわる必要はなく、回ごとにテーマを変えた方が良いものになると思われる。7月の市民協働推進委員会でブラッシュアップした企画書を確認し、最終の微調整を行いたい。

○事務連絡

<事務局>

若者が地域に対して抱いているリアルな思いやイメージを聞き、それぞれの活動やこれからのまちづくりに繋げていく、まちのわ会議を6月19日（金）に開催する。3回シリーズの1回目は、「若者のリアルな声」として、若者が何を感じ、何を求めているのか、普段なかなか聞くことのできない本音に耳を傾ける場を設ける。

次回 第2回 令和8年7月21日（火）午後6時から

第3回 令和8年9月15日（火）午後7時から

午後9時 閉会